

「日々の理科」(第 4191 号) 2026, -1, 30

## 「山梨県扇山の山火事 (5)」

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

現場まで足を運んで一番驚いたのは、火事の現場が民家（集落）に非常に近いということでした。この日の現場は扇山西麓（山梨県大月市）の、山と山にはさまれた谷状の地形に広がる山林でした。



もともと道が狭い上に、火災現場は消防関係の車両が入れず、更に冬季は沢の水も枯れていて、消火活動を相当に困難にしているようでした。地元の地区には一部を除いて避難指示は出でていないようでした。



このあたりの山林は、ほとんどがスギの植林地です。スギは常緑樹ですが、今の時期は枝や葉の水分が少なく、延焼しやすいのだそうです。私が見ていた位置からは火災の炎は全く見えませんでした。しかし時々新しい樹木に燃え移ると、大きな煙が立ち上がり、風向によっては、針葉樹が燃える独特の煙の臭いが漂っていました。



地上からの消火が難しい中、山火事消火の主役は自衛隊のヘリコプターでした。私が見ていた時だけでも、数分に一回、消火液を搭載したヘリがひっきりなしに飛来していました。



小さく見える赤いタンクですが、いざ放液すると、相当に広範囲に行きわたります。火事場風（上昇気流）もあり操縦には卓越した技術が必要でしょう。



火災地域の入口は、消防署、警察、消防団の前線本部になっていました。24 時間体制の延焼警戒だそうで、火災が長引いて延焼が西に広がっていただけに、本当に頭が下がりました。